

綾藺笠を愛したのは誰か : 梁塵秘抄三四三番歌考

大木, 桃子
福岡大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1909518>

出版情報 : 語文研究. 121, pp.1-12, 2016-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

綾蘭笠を愛したのは誰か

— 梁塵秘抄三四三番歌考

大 木 桃 子

はじめに

君が愛せし綾蘭笠 落ちにけり落ちにけり 賀茂川に川
中に それを求むと尋ぬとせしほどに 明けにけり明け
にけり さらさらさやけの秋の夜は

梁塵秘抄（以下秘抄と略す）三四三番の歌である。「あ、い、せ
あやいがさ」、「かもがわに かわなかに」というア音、
ア段の頭韻。「落ちにけり落ちにけり」「明けにけり明けにけ
り」のリフレイン。「さらさらさやけ」というサ音の繰り返し。
し。一首は、

「落ちにけり」「明けにけり」のそれぞれの繰返しが、はず
ずんだ気分と快い律調を添えている。どこか飄逸なところ

もあり、全体として叙情味豊かな秀作。

（新編日本古典文学全集脚注）（注し）

秋の月も、暁けの明星も、清く照った世界として見えて
くる。光る川波も、流れる綾蘭笠も、それを追う二人の
黒い影も、風も川原も、みな生き生きと踊って見えてく
る。おそらく「梁塵秘抄」中でも最も美しい傑作の一つ
と、私はこの「うた」のことならいくら話しても話した
りない気がいたします。（秦恒平『梁塵秘抄』（注し））

と、リズム感や情景の美しさで、現代人をも惹きつけてやま
ない歌となっている。秘抄全体に言えることであるが、特に
この歌に関しては歌謡研究者以外からの発言が多いのも特徴
である。しかし歌の魅力と裏腹に一首の解釈はまだ定まらな
い。先入観を排して本稿で考察する。

一、従来の解釈

美しく飾った藺笠を綾藺笠という。秘抄に、

327武者を好まば小胡籜 狩を好まば綾藺笠 捲り上げて

梓の真弓を肩に掛け 軍遊びをよ 軍神

とあり、今昔物語集にも四例を見る。

紺ノ襖ニ欸冬ノ衣ヲ着テ、夏毛ノ行膝ニ履、綾藺笠ヲ着
テ、征箭三十許、上指雁膀ニ並指タル胡籜ヲ負テ、手太
キ弓ノ革所、巻タルヲ持テ、打出ノ太刀帯テ、腹葦毛ナ
ル馬ノ長七寸計ニテ打ハへ長キガ、極タル一物ノ進退ナ
ルニ乗テ……

(卷二十五第五)

他の三例も、行膝を着け、胡籜・太刀・弓矢を帯びて馬に乗る武士である。従って綾藺笠の持ち主が武士であることは動かし難い。

植木朝子の『梁塵秘抄の世界』^(注3)に諸氏の解釈が手際よく整理されているが、参考にしつつ諸解釈を改めて検討してみよう。

塚本邦雄は「君」を若侍として、従者が主君への忠誠から徹夜で真剣に笠を採したのだとする。^(注4)この解釈は塚本独特のものであり、他の諸氏は背景に男女関係を想定する。当該歌

が、恋愛歌群と言われる十首の歌の最後にあるからである。直前の数首を挙げる。

338 巖粧狩場の小屋習ひ しばしは立てたれ閨の外に 懲

ろしめよ 宵のほど 昨夜も昨夜も夜離れしき 悔過は

したりともしたりとも 目な見せそ

339 われを頼めて来ぬ男 角三つ生ひたる鬼になれ さて

人に疎まれよ 霜雪霰降る水田の鳥となれ さて足冷た

かれ 池の浮草となりねかし と揺りかう揺り揺られあ

りけ

340 冠者は妻設けに来んけるは 構へて二夜は寝にけるは

三夜といふ夜の夜半ばかりの暁に 袴取りして逃げにけ

るは

341 わぬしは情けなや わらはがあらじとも住まじとも言

はばこそ 憎からめ 父や母のさけたまふ仲なれば 切

るとも刻むとも世にもあらじ

342 美女うち見れば 一本葛にもなりなばやとぞ思ふ 本

より未まで繕らればや 切るとも刻むとも 離れがたき

はわが宿世

三四四・三四五が仏教に関する山の名の物尽くし歌謡で、テーマが変わっていることから、当該歌はそれ以前の恋愛歌群に含めるのが妥当と考えられるのである。

塚本の解釈は、自作の短歌の中にも見られる男同士の絆への興味ゆえの発想であるが、

「君」は動かぬところだが、従者は動くかも知れぬ。だが、河に落ちた笠を、まさか女が、それも徹夜で探しはすまい。主従の関係を考へるのが自然である。

という理由によるものでもある。問題点はまさにここにあり。綾蘭笠を愛した「君」は持ち主自身と想定するのが自然である。だが、恋愛の歌とした場合、探したのが女であり得るのかという疑問が生じるのである。そのため、諸氏は解釈にさまざまな工夫を凝らしている。

新聞進一は、

河原で笠を無くしたのでなく、舟に乗っている遊女が、恋人が愛した笠を川中に見失って、共にその行方を追っている間に夜が明けたとみる見方で一応よいかと思つている。

と述べ、二人で笠を探し求めて夜を明かしたと解している。^(注5)笠を探すという口実のもとに、男女が一夜を共に過ごしたというわけである。「はじめに」で引いたように秦恒平も、

その笠を二人がかり、でしようね、愛しあっている男と女と、それも若い二人で流れに沿うてさがし求めた秋の一夜の、清々しく澄みきった印象。

と述べる。新日本古典文学大系の脚注も、

「求むと尋ぬ」のは形式的目的。恋人同志、月明りの河原を語らい歩く楽しさの表現。

と、二人で過ごしたいがゆえの口実とし、「洗練された芸謡。女性の息を感じる。都女の粹。」とも注して歌主を女性とする。事実でなく比喩と見る向きもある。佐藤春夫は、根拠をはっきり示していないが綾蘭笠を愛したのを女として、

何しろあの人が気に入りのものだからと、あちらこちらへ追つかけまはすうちに夜があけたといふ。恋の口説に明けた一夜のたとへ歌と見たがよからうか。事実を歌つたとすればムリが多いから。それともころがりまはる笠にあやつられて、おつかけまはすのも、また恋の苦勞の一つと、こつけいにも哀れなユーモアと読むのがよいか。(中略) 時代が変つた今では風俗的によくわからないから、やはり一つの比喩と見ることにした。

とする。^(注7)渡邊昭五は、

笠が女、(落ちにけり)が失うといった譬喩に考えると、それは鴨川の河川敷に仮小屋を並べた遊女というよりは、寺社参詣の中流階級の女などに想像が馳せる。(中略) 美女打ち見れば…の思いで見染めた女も、その身装風態だけで出自もわからず、結局は再び求めて鴨川あたりの

一夜を散策する始末となつてしまつた……という男の切ない思いを、三四二の連作として鑑みてよいであらう。

と、ひとめぼれの女を追い求める比喩の可能性を示す。^(注8)

吾郷寅之進は、和歌の表現との綿密な比較考察と秘抄の配列への考慮をもとに、女の恨みの歌と見る。^(注9)

「君」が綾蘭笠を着用するものであり、かつ男であるということは明らかである。その男に対して、あるいはその男のことを「君」というのであるから、歌主は女であると考えられる。(中略)これらの歌を含めた配列上の関連(本歌以前の四首——稿者注)を考えれば、本歌の趣旨も、前述のように(後撰和歌集・大和物語の歌を指す——稿者注)女の抗議乃至怨みが、冷淡皮肉の念をその中に潜めたような客観的な表現の形をとつたものと考えられるのである。ただこの一首の軽快な表現からみれば、女——歌主——の抗議とか怨みとかいつても、それはさほど深刻なものではなく、淡白な揶揄を主としたものであると思われる。

笠を探して訪ねて来られなかつたんだという男の言い訳を繰り返して、女が軽く往なしている歌と解しているのである。榎克郎の解釈も、

「笠を落としたので心ならずも来れなかつたんだ」という

男の下手な言い訳をからかつた遊君の歌、と解してみた。と、女を遊女と見なしているものの吾郷と一致する。^(注10)

浅野健二は、梁塵秘抄の「君」の用例が限定的に遊女を指すとした上で、

歌主は男で、途中で落とした笠を探すために徹夜して、とうとう女の許へ訪ね得なかつたという弁解の歌と見るのが、もつとも自然な解釈のように思われる。

とする。^(注11)この場合、笠を愛したのは持ち主でなく、女(遊女)ということになる。

植木朝子は、浅野の「君」遊女」説が、秘抄歌において成り立たないことを証明した上で、「君」を女性とする浅野や佐藤の説に、「他者が好む自分の持ち物を、その他者が好むが故に一晩中探し求めるといふのは、やや特殊な状況」と疑義を差し挟む。^(注12)そして吾郷や榎の「女のもとを訪ねなかつた男の言い訳を、女がからかいながらも一度繰り返している」という解釈が、今まで提出された中では一番説得力があると思へる。

一方、馬場光子は、真鍋昌弘の「民謡の中に笠を忘れるという類型がある」という説を受けて、

君の落とした笠を尋ね求める、という発想は、やはり、君の笠を拾い置くことによつて、君に会う為であらうと

思われる。だからこそ、一晚中、笠を探すのである。
と言(注)う。これについては後述する。

以上のように当該歌は、歌主が男か女か、事実か比喩かも定かでない、当然歌意も明確になっていない。諸氏は、リズムや表現の美しさを強調することに重心を傾けているように思われる。(注)しかしそれはあくまで近代的な感覚であり、秘抄歌の解釈の方法としてやや不自然ではなからうか。

二、「愛す」という語

「愛す」は、「賞玩する・大切にする」という意味だとされる。従って歌主が女なら「あなたが大切にしていた」、男なら「お前さんのお気に入りだった」と解釈されてきた。「愛す」の意味が議論されたことはないようだが、果たしてこの解釈でよいのであろうか。

秘抄の「愛す」二例のうち、もう一例は、

121法華を行ふ人はみな 忍辱鎧を身に着つつ 露の命を
愛せず 蓮の上に乗るべし

という法文歌である。諸注釈の指摘どおり法華経勸持品の偈を踏まえており、一二〇歌と合わせて、

・・・我等仏ヲ敬信シタテマツリテ、当ニ忍辱ノ鎧ヲ著

ルベシ。是ノ経ヲ説カンガ為ノ故ニ、此ノ諸ノ難事ヲ忍バン。我身命ヲ愛セズ。但無上道ヲ惜シマン。我等来世ニ於イテ、仏ノ所囑ヲ護持セン。

の部分の今様化とされる。命を大事にする、惜しむ、という意味になるが、三四三番歌と同列に論じられない。名詞の「愛」なら、

380遊女の好むもの 雑芸鼓小端舟 簀翳爐取女 男の愛
祈る百太夫

がある。遊女の職業上必要なものが列挙された物尽くし歌謡で、百太夫に祈る「男の愛」は客の男性の寵愛、すなわち彼女らの裏芸である売春を指す。「愛」を含む熟語に範圍を広げると数例が挙げられる。

307いづれか法輪へ参る道 内野通りの西の京 それ過ぎ
て や 常盤林のあなたなる愛敬流れ来る大堰川(傍線部原文) あるいは行——稿者注)

ややわかりにくいのが、「愛敬」は大堰川沿いの遊女の媚態と解されている。

376楠葉の御牧の土器造 土器は造れど女の貌ぞよき あ
な美しやな あれを三車の四車の愛行輩にうち乗せて
受領の北の方と言はせばや

愛行輩は婚礼用の手車のこととされる。以上「愛」はいずれ

も性行為を暗示する場合に用いられる。

夙に宮地敦子が指摘するように、^(注16)そもそも「愛す」は院政期以前の和文中にほとんど出てこない。わずかに栄花物語、大鏡、堤中納言物語「虫めづる姫君」にそれぞれ孤例が見えるのみである。栄花物語では花山院が皇女に対して、大鏡では村上帝から親族の臣下に対してであり、いずれも目下への行為に用いられている。堤中納言の例は、姫君が虫を「大切にする・賞玩する」という意味とされ、辞書にもよく引かれる。

眉さらにぬき給はず、齒黒め、さらにうるさし、きたな
しとて、つけ給はず、いと白らかにゑみつ、この虫ど
もを朝夕に愛し給。

題名に反して、実は本文中に虫を「めづ」という表現はない。「蝶めづる姫君のすみ給かたはらに」住む「按察使の大納言の御むすめ」が虫に接する様子は、「愛し給」のほか「まぼり給」「興し給」である。「めづ」でなく「愛す」を使ったのは、対象が珍奇なものであることを強調するためではなからうか。時代が下り、今昔物語集には「愛す」の用例が頻出する。多くは親から子に対するもので、臣下、馬などへの用例もあるが、やはり目下に対してしか用いられていない。そして物を「愛す」行為は、必ずしもよい結果を生んでいない点が注目される。

例えば、慳貪女が煎餅を「造テ此ヲ愛シテ食ト」し、惜しんで托鉢に来た貧頭廬尊者にやらなかつたため、尊者が餓死して異臭が満ちるといふ話がある（巻三第二十三話）。また、六波羅蜜寺の講仙という僧は、読師も勤めるほどで極楽往生間違いなしと思われていたが、僧房の前に植えた橘の木を「常ニ護リ此レヲ愛シ」たことよって死後小蛇となつてしまつた（巻十三第四十二話）。紅梅に執着し「他ノ心無ク此レヲ愛シ」、花が散れば集めて箱に入れ、「程下過グルマデ匂ヲ愛シ」したため、蛇になつた女子もいる（同第四十三話）。悲しんだ両親が法華八講を行つたおかげで女子は成仏できたのであるが、彼らはもともとこの女子を「愛シテ傳ク事無限」であつた。子に対する愛でさえ、悲劇に見舞われることもあるのである。「子ヲ愛シ悲シニ依テ」、馬となり畜生道に落ちた父母もいる（巻十九第三話）。愛執の結果である。

物に対しては、次のような例もある。

此ノ硯ヲ取出シテ見ルニ、実ニ伝へ聞キツルヨリモ云ハ
ム方無ク微妙ナレバ、愛シテ、手裏ニ居テ、差上ゲ差下
シ暫ク見ル程ニ、人ノ足音ノ為レバ、忽テ置カムト為ル
程ニ、取り□シテ打落シツ（巻十九第九話）。

大臣が女御に奉るため厨子に保管していた硯を、仕える者がこっそり触っているうちに落として割つてしまふ場面である。

硯を手の内に置いて撫でさせる動作と理解される。また別に、

今夜、正シク女ノ彼ノ許ニ行テ、二人臥シテ愛シツル顔

ヨ（卷三十一第十）

と、男女の性行為を表わす例もある。

宇治拾遺物語には三例の「愛す」がある。二例は馬と犬に
対してである。今一例は僧の少年への同性愛である。

（一乗寺僧正は）呪師小院といふ童を愛せられけり。．．．
あまりに寵愛して、「よしなし。法師になりて、夜る昼は
なれず、つきてあれ」とありけるを．．．（卷五・九）

以上の用例から次のことが導かれる。「愛す」は基本的に良
い意味合いを持たない。性愛表現に用いられることがある。
物に対しては、単に「大切にする、気に入る」というより、
異様に執着するか愛撫するという意味がふさわしい。これら
に鑑みると、三四三番歌の従来の解釈が妥当でないことがわ
かる。綾蘭笠は大切にされたのではなく「愛撫された」のであ
り、性行為が関わっていると見通される。

三、綾蘭笠が意味するもの

このことを前提に視野を転じると、新猿楽記の「蘭笠」の
比喩に行き当たる。伏見稻荷の祭礼に行われる芸能見物

に來た大家族、右衛門尉一家。十四女の夫は次のように描写
される。

不調白者の第一なり。．．．ただし一の尿あり。謂はく、
開大くして虹梁を横へたるがごとく、雁高くして蘭笠を
戴けるに似たり。長さは八寸、大さは四伏。紐結の附贅
は蜘蛛の咋ひ付けるがごとし。帯縛の筋脈は蚯蚓の跂ひ
行くがごとし。剛きこと栗の株のごとく、堅きこと鉄鎧
のごとし。晩に発ひて晝に萎ゆ。あへて嫁がるる女なし。
ただし十四の御許一人のみこれを翫ぶ。これを愛するに
聊も憚るところなし。

また本朝文粹「鉄槌伝」には次のようにある。

．．．鉄槌、字は蘭笠、袴下毛中の人なり。一名磨裸。
其の先は鉄脛より出づ。身長七寸、大口にして尖頭、脛
下に附贅有り。少き時に袴下に隠れ處て、公主頻りに召
せど起たず。漸く長大するに及びて、朱門に出仕す。甚
だ寵幸せられ、頃之擢でて開国公となす。

蘭笠は男根の比喩に用いられる。前者はそのものずばりで
あり、後者は擬人化して出世譚に仕立てる。前述のように蘭
笠を美しく飾ったものが綾蘭笠と呼ばれる。笠の上部に髻を
入れる突起があり、男根を連想しても不思議でない。三四三
番歌の綾蘭笠もまた男根の比喩ではないだろうか。

秘抄の研究者が、新猿楽記と鉄槌伝を見落としたとは考えにくい。榎克郎が「藺笠を男根の隠語（『本朝文粹』参照）と勘繰るのも、一首のムードにそぐわない」と言っているところを見ると、この比喩に言及した人がいるのだから、稿者は寡聞にして知らない。諸説に反映されていないのは、表現の類似性から作者が共に藤原明衡である可能性が高いため、根拠とするに薄弱であるからだろうか。歌の表現に引かれ、男根を持ち出すことのためにためらいがあったのだろうか。しかし秘抄の歌の配列に注意を払い、また新猿楽記と秘抄の世界の共通性に思いを致すと、看過できない比喩である。

新猿楽記冒頭部に列挙される芸能が梁塵秘抄の歌と深い関わりを持つことは、既に諸氏によって指摘されている。例えば、「蜋漉舎人が足仕」は梁塵秘抄の、

395 海老漉舎人はいづくへぞ 小魚漉舎人がり行くぞかし
この江に海老なし 下りられよ あの江に雑魚の散らぬ
間に

及び三九六番歌と関係があり、これらを歌いながら現在の「泥鰌すくい」のようなしぐさの芸能を行ったのだろうとされる。

「侏儒舞」「傀儡子」「八玉」は、
330 よくよくめでたく舞ふものは 巫小檜葉車の筒とかや
やちくま侏儒舞手傀儡 花の園には蝶小鳥

の侏儒舞、手傀儡、やちくま（やつたまの誤写という説がある——稿者注）とそれぞれ関連する可能性があり、「蠶娘舞の頸筋」は、

331 をかしく舞ふものは 巫小檜葉車の筒とかや 平等院
なる水車 囃せば舞ひ出づる蠶螂 蝸牛
の、「囃せば舞ひ出づる蠶螂」と関係付けられる。蠶螂が鎌を振り上げる様子を模した芸能があつたとされる。「東人の初京上り」は、

473 東より昨日来れば妻も持たず この着たる紺の狩襖に
女換へたべ
との関係が指摘されている。都慣れしていない男の言動を滑稽に演じた寸劇であるかもしれない。「氷上専当が取袴」も、恋愛歌群のうち三四〇番歌の、冠者が「三夜といふ夜の夜半ばかりの暁に 袴取りして逃げ」た様子を連想させる。

新猿楽記には、右衛門尉の娘十六人とその夫、九人の息子たちの職業尽くしの面があるが、娘のうち職業をもつのは四女と十六女だけで、それぞれ巫女と遊女である。巫女・遊女は秘抄歌に歌い込まれているだけでなく、今様の主な担い手でもある。息子と女婿の職業も、博打・武者・修験者・受領など秘抄に見える職業と重なる。

このように新猿楽記と今様の世界は極めて近い。右衛門尉

の十四女は、夫の、藁笠の突起のような巨大な男根を「愛するに聊も憚ること」が無かった。三四三番歌の「君が愛せし綾藁笠」も同じように解釈すべきだと思ふ。

四、笠が賀茂川に落ちるといふこと

白河院が、双六の賽、山法師と共に意のままにならないものとして挙げたという賀茂川の水。秘抄歌においても「261賀茂川桂川いと速し」「312賀茂川は川広し」と、流れの速さ、川幅の広さが強調される。では、笠が川に落ちるといふのはどういうことを意味するのか。

古今著聞集に以下のような話が載る。嫉妬深い妻をもつ下つ端の蔵人がいた。長年、あることないことにつけて責められ苦しいので一計を案じる。亀を求めて首を引き出し、三、四寸ばかりのところまで切つて隠し持っていた。あるときまた妻と喧嘩になる。

男いふやう、「せむずる所かやうの口舌のたえぬは、これゆへにこそ」とて、刀をぬきて、をのれがまらをきるよしをして、ふところにもちたる亀のくびをなげいだしたりけり。ちみどろなる物の三四寸ばかりなれば、其物にたがはざりけり。

妻は驚いて反省する。男はしばらく傷が痛むふりをして伏していた。何か月かして、妻が股の部分に黒い布を当てていた。いぶかしく思つて男が尋ねると、「きりて捨給し故人がため」の喪服だとしおらしく答えるのだつた（巻十六・五四七）。

今昔物語集には、妖術によつて男根を失つた男たちの話がある。道範という滝口が陸奥へ遣いにいく途中、信濃の国の郡司の家に泊まつた。彼は郡司の若い妻を垣間見る。主人に對して疚しい気はしながら、美しさに惹かれ寄り伏して關係を結ぼうとした。ところが、

氣悪クモ辞ブ事無ケレバ、懷ニ入ヌ。其程ニ、男ノ聞ヲ痒ガル様ニスレバ、搔搜タルニ、毛許有テ、開失ニタリ。驚キ怪クテ、強ニ搜ト云ヘドモ、惣テ頭ノ髪ヲ搜ルガ如ニテ、露跡ダニ無シ。大ニ驚テ、女ノ微妙カリツル事モ忘レヌ。

男の戸惑う様子を見て、女は微笑む。腑に落ちないまま部屋に戻つた道範は、男根の件は言わず、郎党たちを女のもとに行かせる。順々に行つて戻つてきた郎党たちは、一様に驚き呆れた様子を見せるのだつた。翌日、納得がいかないまま出発した道範一行を、郡司の郎党が追つてくる。「急ガセ給ヒケル程ニ、此レヲサヘ落サセ給テケリ。然レバ拾ヒ集テ奉ル也」といつて渡されたのは紙に包んだ人数分の男根であつた。昔

習った妖術で郡司が取ったことを後に知り、道範自身も修行をすることになる（巻二十第十話）。

二つの話は滑稽であり哀れでもあるが、男女の性愛の本質をよく表していると言えよう。一章で、笠を愛したのが女である場合、「他者が好む自分の持ち物を、その他者が好むが故に一晩中探し求めるといふのは、やや特殊な状況」であるという植木朝子の見解に触れた。しかし、男根の比喩であれば不自然さはない。当該歌は、「綾蘭笠すなわち男根を、賀茂川に落として探していたために行けなかつた」という、男の言い訳の歌である。もちろん見え透いた嘘であるが、女は男を責めることができない。綾蘭笠を愛したのは他ならぬ女自身であるのだから。

さて一章で馬場光子が当該歌を「君の笠を拾い置くことによつて、君に会う為であろうと思われ」と解釈していること、それが真鍋昌弘の「民謡の中に笠を忘れる」という類型がある」という説に基づいていることに触れた。

真鍋は「笠を忘れた」という類型の歌を、近世から古代へ遡る形で網羅的に示している。

笠は呪力のある神聖なものであり、恋のまじないに関わる指摘する。思う人が忘れた笠を取って置くことが再会の子祝になるといふのである。そして、

なごり言ふとてかさを百川へながした

おりてとめおけかならずとり二いかふぞ

笠ハ留メたがとのをバ得留メまいそよ

ひるのやくそくこよゆハ留メてまいらせう

（大毛寺叶谷本『田植歌及紙』）

を紹介する。この田歌は、友久武文が、吾郷寅之進の『中世歌謡の研究』の書評の中で三四三番歌との関連を指摘して例示したものである。

真鍋は、類型の延長線上に、東遊歌・駿河舞の、

いはたしたえ 笠忘れたり や いはたしたえ 殿ばら

も しるくもがなや 笠まつりおかむ や 知らざらむ

あぜかその殿ばら知らざらむ いはたなるやたべの殿は

近き隣を 近き隣を

があるという。さらに笠以外にも花・太刀・鳥籠などさまざまなもの忘れられており、太刀に関しては古事記歌謡の、

嬢子の床の辺に我が置きしつるきの太刀その太刀はや

も関係するのではないかと推察する。馬場によれば、三四三

番歌はすなわち、恋しい人が落とした笠を拾いおいて所持す

ること、再会を予祝する歌であるということになる。

稿者も、笠の呪力、そして落としたものを留め置くことによつて再会を願うという民謡の発想のパターンが三四三番歌

にも流れ込んでいることを否定しない。だがそれだけでは「愛す」という言葉が敢えて用いられたことや、当該歌が赤裸々な歌の並ぶ恋愛歌群の最後に配置されたことを説明しにくい。女が愛撫した綾蘭笠——従来叙情的で洗練されていると言われていた当該歌は、滑稽でエロチックな、まさに秘抄にふさわしい歌なのである。

おわりに

三章で触れたように、秘抄歌は新猿楽記の世界と密接に関わる。当該歌も猿楽の物まねや寸劇の際に歌われた可能性がある。笠を頭に被ったり股間に当てたりした後、川に流す真似をする。それを慌てて探す動作が続く。芸能者たちによって演じられただけでなく、宴席の余興で行われたかもしれない。所作を伴った秘抄歌の一つに、当該歌を新たに付け加えたい。

注

- 注1 新聞進一・外村南都子 『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』
二〇〇〇年
- 注2 NHKブックス 一九七八年
- 注3 『梁塵秘抄の世界 中世を映す歌謡』 角川書店 二〇〇九年

- 注4 『君が愛せし』 みすず書房 一九七七年
- 注5 『鑑賞日本古典文学 歌謡Ⅱ』 角川書店 一九七七年
- 注6 小林芳規・武石彰夫 『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』 岩波書店 一九九三年
- 注7 『美の世界』 朝日新聞社 一九六二年
- 注8 『梁塵秘抄の風俗と文芸』 三弥井書店 一九七九年
- 注9 『中世歌謡の研究』 風間書房 一九七一年
- 注10 新潮日本古典集成『梁塵秘抄』 新潮社 一九七九年
- 注11 鑑賞日本の古典『今昔物語集 梁塵秘抄 閑吟集』 尚学図書 一九八〇年
- 注12 注3参照
- 注13 『中世近世歌謡の研究』 桜楓社 一九八二年
- 注14 『今様のころとことば』 三弥井書店 一九八七年
- 注15 例えば馬場光子は、
歌う者は、あるいは、聴く者は、どうして笠が落ちたのか、なぜ探しているのか、それらの意味に疑問を持つ必要はなく、というより、疑問は次々に流れ出す音の響きに漂い去って、繰り返しのままに、ことばによって生み出された、流れゆく美しい時間を感じればよいように、この歌は情調的芸謡として完成されていると思われるのである。
と評す。注14参照
- 注16 『「愛す」考』 国語国文35・6 一九六六年 『「愛す」続考』 国文学論叢（龍谷大学）22 一九七七年
- 注17 注11参照
- 注18 伝承文学研究十二号 一九七二年

*引用本文はそれぞれ次に拠った

梁塵秘抄 新編日本古典文学全集『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』
今昔物語集 新日本古典文学大系『今昔物語集』
堤中納言物語 新日本古典文学大系『堤中納言物語 とりかへばや物語』
宇治拾遺物語 新日本古典文学大系『宇治拾遺物語 古本説話集』
新猿楽記 日本思想大系『古代政治社会思想』
鉄槌伝 日本古典文学大系『本朝文粹』
古今著聞集 日本古典文学大系『古今著聞集』

(おおき ももこ・福岡大学非常勤講師)